

陸自駐屯地紹介シリーズ 第29回

中部の守り 豊川駐屯地

第49普通科連隊・第10特科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

始めに

駐屯地が所在する豊川市は、日本三大稲荷の所在地として知られている愛知県東南部の都市である。静岡県との境界近くにあり、自動車産業の豊田市、徳川発祥の地岡崎市に近く、多くの神社仏閣名所旧跡が点在する繁栄の中にも落ち着いた都市だと云われている。



東京から東海道新幹線で約70分、豊橋

駅で下車し飯田線特急に乗り換えて水田と家並みの混在する平地を北に約10分で豊川駅に着く。改札口はそれほど大きくはないが、構内土産物売店の並びには折々の賑わいを想像させられる雰囲気があった。迎えに来て頂けることで、有り難く北口で待つことにした。その間に駅前風景を観察したが、まさに稲荷神社の門前町で、駅前のロータリーに漫画的に造形された子狐達が舞っている像があり、やや離れた通りを見ると、参詣者を迎える商店街の入り口らしく歴史を感じさせる店が並び、その先には年代を経た柱があった。

迎えの車の中で聞くと、この日8月7日は駐屯地は大変忙しい。官舎地区での音楽会、災害派遣MM(同上)研究、災害派遣隊員帰隊出迎え行事、駐屯地幕僚会議が集中し、駐屯地司令業務の重要なメンバーである広報班の要員は取材に対応する要員の苦しさから、退

職が迫って付配置となり研修中の准尉の出勤を求めて応じてくれたのであった。申し訳ない。さらにこの日、大東軍戦争末期の豊川海軍工廠被爆犠牲者慰霊の「みたま祭り」行事が近くの豊川稲荷境内で行われていると云う。取材日としてはこの上ない日と感じた。

車が走り出し、すぐ右手に豊川稲荷への参道を見やり、低い石垣と年を経た柱を過ぎるとやがて駐屯地正門前に着いた。思いの外狭い宮門で、砲などを繋引した車両縦隊は道路に出やすい裏門を使うことが多いとのことであった。

駐屯地を取り囲む町並みについて尋ねると、南側には有名なカメラメーカーの巨大な倉庫、豊川市役所、運動センター、運動公園が並び、西側から北西にかけては新幹線車両等を製造する日本車輛の工場、名古屋大学太陽地球環境研究所を始めとする工場、研究所が並んでいると説明された。東南東約1kmの豊川稲荷は、豊川閣妙厳寺と云う曹洞宗の寺院の中にある仏教守護神を祀る堂塔なのである。

駐屯地所在部隊

この駐屯地は昭和25年10月に創設され、中部方面隊管内でも有数の広さがあり、一等隊佐を長とする部隊が4個もあって、隊員の数も多い。特性の異なる部隊がそれぞれの訓練順次に従

い駐屯地を留守にする中で駐屯地の警備や整備作業割り当て、駐屯地統一の行事の日程決定、部外協力の手当などその調整にはかなりの苦心が必要と窺われる。駐屯部隊について若干述べてみたい。

第49普通科連隊

第10師団(司令部は名古屋守山区)隷下の普通科部隊である。創立は新しく平成15年で、陸上自衛隊全般の編成削減に伴って新編された。平常は基幹となる要員が配置され、有事には即応子備自衛官が招集されて充足される部隊である。

その日常を想像してみたい。まず即応子備自衛官が招集された時に各個人に補給する個人装備品や個人器具の維持管理、部隊装備の武器・車両・通信機の機能維持の作業がある。後方支援連隊の支援を受けて行うにしてもかなりの隊力の投入が必要であろう。

ついで即応子備自衛官訓練招集時の野外訓練計画の準備がある。この訓練招集は、神代時代の子備自衛官招集訓練の如き精神教育、体験射撃、基本教練で終わるものではなく、実際に防衛招集を受けた後配置される職務に従って各個訓練、部隊訓練を行う事が求められている。短期間の招集期間中に部隊全体が所望の練度に到達するための教育訓練計画の作成や予行などが当然



新隊員教育隊

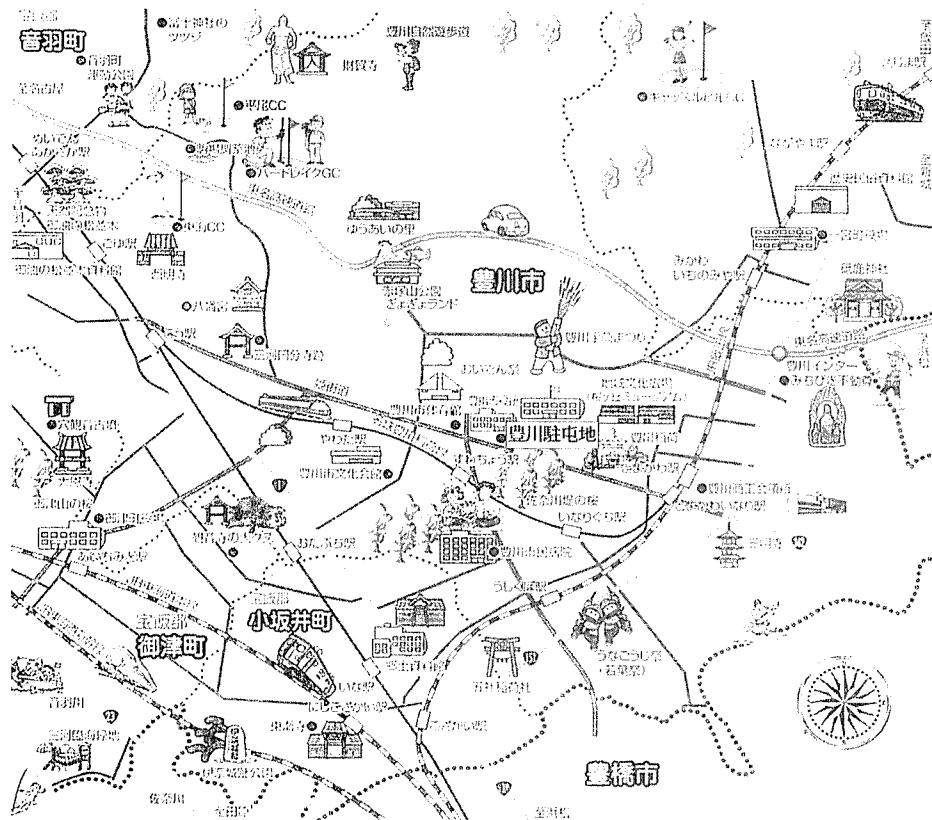
必要であるが、その起案段階・実施段階・演習後の研究検討段階において特に配慮しなければならないことを理解頂けると思う。
編成部隊欠の訓練と完全編成部隊の訓練では兵站等の重さの違い、例えば、

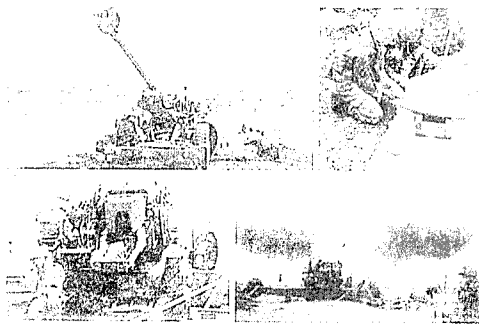
例を部隊展開の所要地積、部隊行進等の所要時間、弾薬・燃料・糧食等の補給量と所要時間と従事人員数にとつてもても厳然たる差があると云える。

勿論コンピュータデータに戰場の実相から割り出したデータを組み込みこれに伴う部隊行動の重さを加味させたとしても、果たしてこれで十分と云えるのだろうか。日頃の服務を通じて練り上げられる以心伝心のチームワークはどんな方法で得られるのか、懸念するところである。

また不完全編成部隊ゆえに隊員一同が「予備又は後備連隊意識」を持たないよう、老婆心ながらも祈るものである。筆者の独断で述べたい。或いは偏見かも知れないが基幹要員部隊は国家の財政逼迫をしのぐため、勢力削減の対策を防衛庁が確立しないうちに見切り発車した性急な施策の気がしてならない。機動能力の向上や即応予備自衛官確保の前提となる基本施策が遅々として進んで居ない気がしてならないからである。加えて朝鮮半島では我が日本の安全保障に懸念とする事態が益々顕著となっているのである。この事態に対処する力を作るのは何よりも必要なことなのではあるまいか。だが既に現実の事態となった今、まず自衛隊で乗り切る態勢を確保しなければならぬのは勿論である。

隊員ご一同のご健闘を心からお願ひするところであるが、せめて即応予備自衛官の数の確保と、訓練招集応募率の確保、即応予備自衛官受け入れ企業の開拓等の根本策については第一線部隊に責任を負わせることなく、政府・防衛省レベルの第一義的な尽力を仰ぎたいと考える。
第10特科連隊
この部隊は、第10師団隷下、師団の





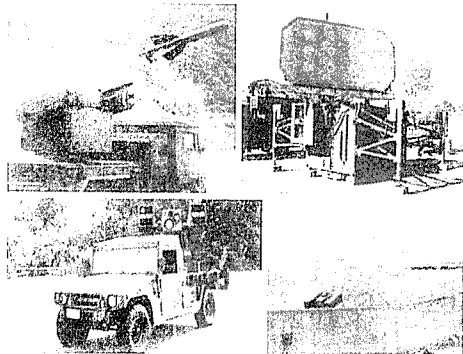
155ミリ榴弾砲 (FH-70) による射撃訓練

火力戦闘に任ずる部隊であり、本部管理中隊と5個の大隊からなっている。かつては第1大隊から第4大隊までは師団の4個普通科連隊をそれぞれ直接支援、或いは配属し、第5大隊は師団の全般支援に任ずる等の部隊運用が一般的であった。その基本は今日も余り変わって居ないと想像するが、射撃性能の要素即ち射距離と発射速度が大きく変わったことから火力戦闘の要領は変わってゆくことが考えられる。

かつて師団特科射距離は15kmと11kmであったが現在約30kmに延伸され、発射速度も格段に増大した。これにより、例えば敵の侵入を阻止する防衛戦等に際しては進行経路上の要点に対し濃密な集中火力を指向できる等の事から、直接支援区分に従う事無く、師団全火力部隊を挙げて従来考えられなかった遠距離火力を敵の接近初期から浴びせることは当然考えられる。

第10高射特科大隊

この部隊はかつて第6大隊として第10特科連隊長の隷下にあつたが、近距離対空誘導弾及び対空レーダーを装備する第10師団直轄部隊となつた。師団全体の対空援護を行う部隊である。



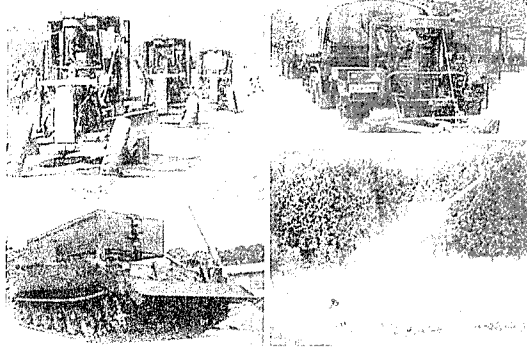
短距離地对空誘導弾及び射撃

第6施設群

この部隊は、中部方面総監直轄第1施設団の隷下部隊である。かつては自衛隊の施設科装備は民間の土工機材に比し隔絶した機能を持つ

ていたが、近年民間の機材は格段に発達した。しかしどんなに民間の機材が発達しても自衛隊に及ばないことがある。大規模災害発生時には作業の企画から燃料の確保、要員の給食、宿泊まで自己完結機能をもって早期に復興に貢献出来るのは自衛隊以外にはあるまい。

まして近年、先進国家として必須の活動となつた国際貢献には自衛隊の施設科部隊は不可欠と考える。過去伊勢湾台風、阪神淡路大震災、中越地震等の災害派遣、カンボジアからイラクま



(上右) 地雷敷設装置 (上左) グレネード (下段) 地雷処理車及び同車からのロケット弾発射

での国際貢献は現役隊員、OB隊員が心から誇りとしてに違いない。装甲の75式ドーザー、92式地雷処理車等は今後も国際貢献に更に活躍するであろう。

第4普通科直接支援中隊

特科直接支援中隊
高射直接支援中隊

この3個部隊は第10師団の第10後方支援連隊(本部は名古屋守山)の隷下部隊であり、それぞれの一線部隊の兵站支援に任ずる部隊である。近代化された部隊装備品の整備に任ずるエキスパートを擁し、また敵火厳しい前線部隊への弾薬・燃料・糧食の補給を行う等の高い機能を持つ部隊である。

施設直接支援中隊

中部方面隊直轄部隊の兵站支援に任ずる中部方面後方支援隊の隷下部隊であり、第4施設群を支援する部隊である。

豊川駐屯地業務隊

この部隊は豊川駐屯地・駐屯地が管理する演習場・射撃場に関する総務、管理・補給、厚生、衛生各業務を実施する部隊であり、この駐屯地の規模が大きいためから隊長は一等陸佐が充てられている。また、業務隊長は駐屯地幕僚会議を主宰するが、この会議に陸曹公(注1) 公長、最前任上級曹長(注2) も合議に参加することとされ

しており、陸軍時代、古い時代の自衛隊には無かった新しい考え方が導入されている。

第306基地通信中隊豊川派遣隊

第10師団管内各駐屯地に展開する基地通信中隊から豊川に派遣された部隊であり、駐屯地間の通信を行うと共に交換所を運営している。この種部隊は性格上常に駐屯地に於ける業務を維持する必要から部隊一斉の野外訓練は極めて難しく、各駐屯地の派遣隊から抽出して集成部隊を編成し訓練する方法で練度を向上しているのが例である。

第308会計隊

警務隊豊川派遣隊



この二つの部隊は人々の目に付くことも少なく、それぞれの任務を静かに遂行している。

第10音楽隊官舎地区慰問音楽会

最初案内された駐屯地広報室には人影はなかった。第10音楽隊の音楽演奏が迫っているため会場へ出払っている。と云う。時間を調整した後官舎地域へ移動した。その途中に駐屯地柵の外側の訓練場や運転免許センターの広い駐車場があった。ここでは空砲を使用する訓練も苦情を受けること無く実施出来ることや、駐屯地創立記念日等広い駐車スペースが必要な時には快く使用させてくれるという説明を聞いたが、心の中で別の言葉に置き換えて聞いていた。「駐屯地周辺とは、密接な関係を確認し日頃から協力して貰っています」。領きながら、満たされる思いに浸ったことであつた。

官舎地域には既に第10音楽隊が待機していた。名古屋守山からの遠来部隊である。夏の陽に熱せられたコンクリートの上に敷かれたシートは座るには躊躇する熱さであつて、三々五々集まって来ている乳幼児を連れた若いお母さん方は、各個バラバラに狭い木陰に身を小さくしていた。冒険心に富んだ子が演奏開始を待つ音楽隊員達に近づき物珍しげに観察を始めると、気づいた隊員は直ぐ腰をかがめて話しかけ

た。ほほえましい光景であつた。演奏が始まってシートの席も埋まり始めた。ポピュラーではあるが、乳幼児には難しい曲であつたにも係わらず、おしめて下半身が着ぶくれている幼児が、お母さんに支えられて歩きだし、両手を広げてバランスを取りながら足でリズムをとり出したのである。カメラを構えて走り寄ると気づいて動作を止め、笑顔を残しお母さんの腕の中に逃げ込まれた。突然ある光景を思い出した。過ぐる年、アフガニスタンの首都カブールでの短い滞在の時、渋滞に巻き込まれた私の車の横に、小さい車を牽いた、おそらくは就学年齢前の幼い女の子が現れた。凡太を切ったままの車輪がついており、約40秒の台車の上には片足の無い揺つらの男が座つていた。止まった車の間を縫って車を牽きながら物乞いをしていたのである。民族特有の大きな瞳と澄んだ目だけになおさら、哀れみを乞う切なさがあつた。思わずドライバーを通して紙幣を渡したが、次第に哀しみと怒りがこみ上げたことであつた。こんな悲惨さをこの次にして、宗派の争いに狂奔しているこの地域の国家の指導者に対する、それこそ青臭い怒りの瞬間を思い出したのである。我が日本にはそんな悲劇を見逃すことはない。いや絶対にあつてはならない。物陰に隠れた時、

演奏が止んで4人のチビッコが選び出され音楽隊指揮の体験へ移った。曲と幼子が振るタクトとのアンバランスはほほえみを生んだ。この音楽隊はこの様にして各地を廻り、未来ある幼子の心に思い出を残すはず、音楽隊員冥利に尽きることはないか、音楽隊長に挨拶し益々の健闘を祈つて会場を後にした。

追悼 海軍工廠

この駐屯地には、戦前の陸軍時代の歴史はない。昭和14年に始まった海軍工廠にかかる歴史が有るが、戦争末期の犠牲の大きさと、関係者の老齢化と共に、この時の犠牲者を偲ぶ追悼の行事があるいは消え去るのではと割愛するに忍びないので述べてみたい。

ここにあつた海軍工廠の広さは、約100万坪の広さがあり、現在の駐屯地の10倍の地積で弾薬、測距儀他を製作していた。昭和20年8月7日、終戦の1週間前、B29の大群により延べ3千余発の爆撃を受け2千600人を超える犠牲者を出した。

犠牲者の名を刻んだ碑銘によれば多くは、勤労動員の中学生、女学生であり、中には少なくない数の高等小学校の児童の名前が刻まれていた。直後、この人達に縁有る人の張り裂ける思いは察するに余りある。「あと1週間後にずれていたら」。いろいろと思いは

巡り、思わず豊川稲荷境内の慰霊碑への案内を請うていた。正式な追悼行事の時刻を外れていたにもかかわらず、多くの人が香華を手向けて拝礼し、その後、に碑の周りを巡って刻された名前を探し出し、人によっては掌で名前をなでていたが、その人々の背筋、髪、顔の皺、進める歩みには歳月の流れが語られていた。その方々を妨げるのではないよう、静かに祈りを捧げて碑を後にした。

駐屯地内に戻り「三河資料館」を拝観した。多目的用途の為に建てられた大きな建物の一角である。入り口で館内を瞥見し視線を目の前に落とされた時、数歩の所にガラス製の陳列ケースがあつて、そこに「脱帽」と表記されていたのである。姿勢を正して低頭してケースの中をのぞき込んで、それが特別攻撃隊員の遺品であることを知った時、「不覚であつた」との思いを深くした。これと同じ史料館は、だいたい何処の駐屯地にもあり、今まで幾つか拝観してきた。だが、博物館や美術館の様に「展示物を見る」のではなく、「史料館では、まず国のために命を捧げた人に感謝し、その冥福を祈る」とこの認識が、今まで明確でなかったことに気が付いた。大いに反省したい。展示されていた物には毛筆で丁寧な記入がしてあり、これならば提供して

頂いた縁ある人々の心も安まるに違いないと考えた。

仲間を迎える心

駐屯地では、中越沖地震災害で部隊が災害派遣中であつた。その中の入浴支援要員が午後2時に交代帰隊するにあたり駐屯地挙げて出迎えることを聞いた。是非その様子を見たいと申し出た。時間前に正門前に行くと、黄色い何本もの特科部隊の応援幟が並び、やがて第10特科連隊長、第40普通科連隊長、第4施設、業務隊長なども並ぶ中を一台のジープが速度をややゆるめて、車長が敬礼しつつ通り過ぎた。迷彩覆付

の中帽に迷彩戦闘服もりりしい二人の女性自衛官であつた。それも只1台、シャッターチャンス逃すほどあつけない早さであつたが、迎える仲間の歓声は高かつた。自衛官一般の意識には、災害派遣出動は誇り高い経験として位置づけられている。「被災者を助けた」と云う誇りは駐屯地に帰隊して仲間の歓声に迎えられることで更に確立する。それは心昂まる光景であつた。

地域と共に

平成15年の夏、近接する運動公園で花火の祭りがあつた。この祭りにイラクから帰国したばかりの豊川からの復興支援隊員50余名が招待された。祭りのプログラムは知らされていなかったらしい。やがてプログラムは進み視

界に広がった仕掛け花火を見て心からの歓声を挙げた。文言はイラクでの貢献を称え、無事帰国を祝うものであつた。これは豊川市商工会議所が主体となつて実施されたものであつた。

豊川部隊に対する協力団体は強力である。豊川市長を頂点とし、三河地区24市町長が役員を務める協力会が、駐屯地に密接に支援して呉れているからである。その詳細を記述すると紙数がいくらあつても足りないようだ。この様な状態に到達し得た陰には勿論協力側の理解があつたことは勿論であるが、災害派遣態勢の整備、地域の行事への協力など地道な努力が評価されていることは十分考えられる。

その評価の陰に協力の際、誠心誠意であつたり、地域が期待する以上のものを提供し続けた第一線部隊長以下の努力があること、また長年にわたり広報業務の配置について努力したベテラン隊員があつたことも述べておきたい。

今回、多忙な中、付配置で研修中の隊員まで配置し取材に応じて頂けたことに感謝するとともに駐屯地隊員一同の健闘を祈念したい。

(注1) 陸曹会について

陸曹が相互の交流・親睦増進を目的とした会で、駐屯地単位で組織されている。駐屯地盆踊り等、隊務に位置づ



中部方面隊音楽まつり出演 (舞洲アリーナ)

けない行事を積極的に担当する等、活躍の場は重要になつていく。

(注2) 最上級者長について

陸曹の最上級者を指定し、隊務の概要に参加させる制度である。現在陸上幕僚監部で検討中の施策である。中部方面隊において施行中の現状は次のとおり。

- ① 指揮官の副官並に位置づけし、陸曹としての立場から指揮官を補助する。
- ② 連大隊級部隊以上では執務個室を用意する計画である。
- ③ 駐屯地における服務に係る事項を議する幕僚会議に駐屯地における最上級の上級曹長は列席する。

(文責 松村興延陸自官)